

(25) イスラエルの歴史と神 (『反キリスト者』の 25)

イスラエルの歴史は「自然の価値のあらゆる非自然化の典型的歴史(typische Geschichte aller Entnatürlichung der Natur-Werthe)」として極めて貴重である。イスラエルの歴史には以下のような五つの「事実」がある。ⁱ

①イスラエルは「王国の時代」にあつては、すべての事に対して「正しい関係」、すなわち「自然な関係」にあつた。「イスラエルの神」であるエホバは「力の意識、自己における悦び、自己への希望の表現」であつた。エホバにおいて「勝利と救済」が期待され、エホバによって「自然」は信頼され、この民族が必要とするもの、なかんづく雨を「自然」は与えてくれるものとされた。

②エホバは「イスラエルの神」であり、「正義の神」である。これは「力」のうちにある「民族の論理」である。「祭儀」においては、この「民族の自己肯定」の両側面が表現される。それは「民族」に繁栄をもたらす「偉大な宿命」に対する「感謝」であり、「四季の循環」や「牧畜農耕」におけるあらゆる「幸福」に関する「感謝」である。

③このような事態は、それが悲しい仕方で絶たれた時も、すなわち、「内における無政府状態」、また「外からアッシリア人」によって終わりを告げられた時も、なおも「理想」として残った。この「民族の最高の願望」は「良き兵士」にして「峻厳な審判者」である「一人の王の幻影」、なかんづく、かの「典型的な預言者」であるイザヤにあつた。

④ただし、「希望」は満たされたことはない。このような「神」は捨てられて当然であるうが、「神の概念」が変えられ、「非自然化」され、代価を支払って「神」は引き留められた。その概念は「僧侶的煽動家」の手の中で「道具」となった。彼らはすべての「幸福」を「報酬」とし、「不幸」を「神に対する不服従、『罪』に対する罰」と解釈したのである。

⑤ここに「原因と結果」という「自然概念」を転倒させた「道徳的世界秩序」という解釈のやり方が出来上がる。この「報酬と罰」によって、「反自然的因果律」が必要とされ、従来の「助け、忠告を与える神」の代わりに「要求する神」が現れる。「道徳」はもはや民族の「生や生長の諸条件の表現」ではなく、その「生の最下層の本能」でもない。それは「抽象的」となり、「生に対立するもの」となるのである。

(26) 救済機械装置と僧侶の寄生主義 (『反キリスト者』の 26)

このようにして「神概念」も、「道徳概念」も偽造された。ただ、ユダヤの僧侶階級はここで立ち止まらず、「偽造の驚くべき事業」を成し遂げた。その「記録」として「聖書」が残された。その際、彼らはすべての「伝承」や「歴史的実在性」を「侮蔑」した。すなわち、彼らは彼ら自身の「民族の過去」を比類のない「侮蔑」をもって「宗教的なもの」へと翻訳した。彼らは、「エホバに対する負い目」を「罰」とし、「エホバに対する敬虔さ」を「報酬」とする「愚かな救済機械装置」を作り出したのである。ⁱⁱ

このような数千年に亘る「歴史解釈」によって、われわれはこの「恥ずべき歴史偽造の行為」を痛ましく感じることもできなくなっている。しかも、哲学者たちがこの行為を助けた。すなわち、「道徳的世界秩序という嘘」は「近代哲学の全展開」を貫いている。「道徳的世界

秩序」とは、①「神の意志」が存在し、「人間のなすべきこと」、「人間がなしてはならないこと」が厳然としてあるということであり、②「民族の価値」、「個人の価値」が、「神の意志」に従う多少によって測られるということであり、③「民族や個人の運命」において、「神の意志」が支配するものとして、すなわち、その「服従の程度」に応じて「罰するものそして報いるもの」としてあるということである。ⁱⁱⁱ

「寄生虫的あり方の人間」である僧侶は、「生の一切の健康な形成」を食い潰して栄え、「神の名」を乱用する。彼らは自分たちが「価値」を決定する事物の状態を「神の国」と呼び、彼らはそのような状態が達成され、維持される手段を「神の意志」と呼ぶ。そして、すべては僧侶の「優位」に役立つか否かによって測られる。かくしてイスラエルの歴史における「偉大な時代」は「頹落時代」となったのである。すなわち、ユダヤ民族の不幸な流浪の時期は「永劫の罰」となり、歴史上のすべての出来事は「神に対する服従あるいは不服従」へと単純化されたのである。^{iv}

このような「僧侶の寄生主義」によって、すべては根本的に「無価値、反価値なもの」とされた。すなわち、僧侶は「自然を無価値にし、神聖さを剥奪する」。かくして、「神への不服従」、すなわち、「僧侶への不服従」、「律法への不服従」が「罪」とされ、僧侶のみが救い、「僧侶に服従する者」を「神」は許すのである。^v

(27) 自己否定の究極の形式としてのキリスト教（『反キリスト者』の 27）

キリスト教は「偽りの基盤」のうえに生長した。それは「支配階級の最も深い本能」に逆らう「実在性に対する不倶戴天の敵」である。「聖なる民族」、「選ばれた民族」であるユダヤ民族は、このキリスト教に「僧侶的価値」を残した。それは「恐怖」を注ぎ込むほどの徹底した「首尾一貫性」でもって、地上で「力」において存続していた一切を「神聖でないもの」、「この世」、「罪」として拒絶した。かくして、この民族は「自己否定に到るまで論理的」であった「究極の形式」を産み出した。キリスト教がそれである。すなわち、この民族が「実在性の究極の形式」、「ユダヤ的実在性そのもの」を否定することになったのはキリスト教としてである。^{vi}

イエスがその首謀者として理解され、あるいは誤解されて来た「蜂起」は、ユダヤ教会に対する「蜂起」であった。また、「イスラエルの聖者」に対する「蜂起」、社会の位階制度に対する「蜂起」であった。それは「社会の腐敗」に対してではなく、「教会、特権、秩序、形式」に対する「蜂起」であった。この「聖なる無政府主義者」は「下層民」や「排斥された者」や「罪人」等を扇動して「支配秩序」に反抗するように仕向けた張本人である。それは十字架の上に「ユダヤ人の王イエス」と書かれたとおりであり、彼は「自分の罪のために」死んだのであり、「他の者の罪のために」死んだという「根拠」はなにもない。^{vii}

ⁱ Ibid., 25, S.193-194

ⁱⁱ Ibid., 26, S.194-195

iii Ibid., 26, S.195

iv Ibid.

v Ibid., 26, S.196-197

vi Ibid., 27, S.197

vii Ibid., 27, S.198